

十人の死体やでる有荷で利達のまはりは病人ばかり今の久家様は無事のに選して
て所るか悪足に生かせることは出来ないと覚悟はしてゐた。

十二月二十日から保安隊の命令で二里余の山に作業を初め二人で毎日働かすに
通ひのひさまで入る空を押分けて作業夜は眞暗な所を寒さにふるへ乍ら一睡も
出来ぬ夜もあつた。

利達の森に家を捨て、事を者と十月位家に居て品物を金に代へた人達とは境
限に非常な差があつて白米をたべ餅を買ふ人があるのを見て子供心に何
んと思つたこととせう親を恨んでくれるな北野の人と威南の人とはそれ大の相
違があるのだから決していよいよからと人の物は盗んでくれるなと内地に帰るまで

の事秘だからと悟した。

宝塚では餅を買つて與へることも出来ず生地獲は此のことかと思つた

こゝでも一軍か来て暴行をする夜は床下にゐた女をけが知る心怖ん
に身を守ることに一番苦心をした。

病人はこゝろくと眞暗な通り途に無惨な死体となつてゐる其の死体につまづ
氣持の悪さでも終には手氣で通れる所になつた。

毎日大勢の死体の仕末をする者は人も居なくなり山の森に積置つた悲惨
な状況を眼のあたりに見て悲憤の涙が止めどもなく頬を伝ふ

羊島人の子供は石を投げり日本人は汚たいと悪口をつかれても一言も言へな
い口惜い悲しい身の置所のない世の中に變轉しまつたのだ。

存情況を眼のあたりに見て悲憤の淚が止めどもなく頬を傳ふ

羊島人の子供に石を投げり日本人は汚たいと悪口をつかれても一言も言へない口惜い悲しい身の置所のない書の中に變轉しまつたのだ

本當にその日本人の次女として居る者は人も居ない服は破れズボンはずれ肌が見えお湯には入れず曾に居たまは試いは作業中そのまゝ飛び出したきり親子別れくになつて探し歩いて居る人きけばきく程あわれな話ばかりでここに書き綴ることは出来ないので残念に思ふ

内地へ歸れる日を唯一つの希望として話はそのことばかり百子叙の思ひの歸へれないものなら何時死んでも思ひ残すことはないのだが何時かは歸へれる日が来るとそれ尤も希望に生長うへてじつと我慢をしておた死んで行く人々は十人か十人歸へりた

くも叫び續けり永遠の眠りついで行く神も佛もないものかと思つた

一日一合の米を四人でたべかつく命とついでおた病氣に罹れば終を子供のなめにどうしてお生きなけれはならない應召家族はほとんどで女子供ばかりの其

上母親に死別れたら哀れな孤兒なるそんな子供が百余名出来たニニ才から十五才位で本當に地獄を死んだ方が幸福だと度々思ふ母はどうして居るか知らなくても金をきて

はおまい氣にかつても音信不通此の妻のことは一切判らないう子供のことも母のことも思ふまい唯現實には生ることを考へたまたく運命の神は容赦なく迫つて来る

それは主人の病氣に罹つたこととてした

何の病氣か判らないう食は普通と変らないう熱もないし只を寒さのどろろで夫したことではない氣を引いた位に思つて居るかニ三日内に足腰が立てなくなつた今うにして思へば先診チブスではなかつたかと思はれるさうして居る内にソ軍

のシラビツト有毒の果ては死んで居るが